

チェコ語の所有構文と結果所有構文

浅岡 健志朗

キーワード：チェコ語 所有 結果状態 小節

要旨

チェコ語では、動詞 *mít* 「持っている」と受動分詞を組み合わせることで、ある対象が何らかの結果状態にある、という意味を表すことができる。本稿では、この意味は *mít* + SC という構造に由来するものであると考え、所有関係を表す *mít* + NP という構造と区別する。多くの場合、*mít* + 形容詞 + 名詞からなる文は *mít* + NP という構造を持つ一方で、*mít* + 受動分詞 + 名詞からなる文は *mít* + SC という構造を持つと言える。このように2つの構造を区別することによって、見かけ上似ているこの2つの文の意味の違いが、それぞれの文が持つ構造の違いから現れるものであることを示す。また、それぞれの文において *mít* + NP と *mít* + SC のどちらの解釈もあり得ること、どちらの解釈が取られるかは結果として生じる文の意味的な整合性によって決まることを主張する。

1. はじめに

チェコ語の文¹ (1) は動詞 *mít* 「持っている」+ 形容詞 + 名詞という要素からなる文で、主語の指示対象（以下、主語）「私」が目的語の指示対象（以下、目的語）「安い車」、「面白い本」を所有²していることを表している。

一方、(2) は動詞 *mít* 「持っている」+ 受動分詞³ + 名詞という要素からなる文で、外見上 (1) とよく似ているが、名詞によって指示される対象（ケーキ、運転免許証、窓、ベッド、タバコ）が受動分詞の表す結果状態（食べられた、没収された、開けられた、整えられた、吸われた）にあることを示す際に用いられる文であり、意味的に (1) とは異なる特徴を持っている。

(1)

a. *Má-m* *levn-é* *aut-o.*
 持っている-1SG.PRS 安い-SG.ACC 車-SG.ACC

¹ 例文はすべて作例であり、その容認性判断は4人のチェコ語母語話者のインフォーマント（ボヘミア出身、20代前半～30代前半）による。

² 所有という概念の特徴付けは Langacker (2009) に則る。所有のプロトタイプは所有権関係 (ownership)、親族関係 (kinship)、全体部分関係 (whole-part relations) に分けられる。所有は参照点能力をその基盤としており、典型的な所有には特権 (privilege) が認められる。チェコ語の所有を表す形式については Piřha (1992) に詳しい。

³ 受動分詞は太字で表示する。チェコ語の動詞は非完結相を表すものと完結相を表すものに二分されるが、受動分詞はこのうち完結相に属する動詞から派生する形式で、長形と短形の区別がある。本稿で扱う受動分詞は全て長形である。長形・短形ともにコピュラと共に受動態を作るほか、長形は名詞を修飾する。受動分詞が名詞を修飾する場合、名詞の性、数、格に従って語形を一致させる。なお、グロスは簡略表記であり、性の表示は省略する。

「私は安い車を持っている」

- b. Má-m zajímav-ou knih-u.
 持っている-1SG.PRS 面白い-SG.ACC 本-SG.ACC
 「私は面白い本を持っている」

(2)

- a. Má-m sněden-ý dort.
 持っている-1SG.PRS 食べられた-SG.ACC ケーキ-SG.ACC
 「私のケーキは食べ終わっている」

- b. Má-m odebran-ý řidičák.
 持っている-1SG.PRS 没収された-SG.ACC 運転免許証-SG.ACC
 「私の運転免許証は没収されている」

- c. Má-m otevřen-é okn-o.
 持っている-1SG.PRS 開けられた-SG.ACC 窓-SG.ACC
 「私の（部屋の）窓は開いている」

- d. Má-m ustlan-ou postel.
 持っている-1SG.PRS 整えられた-SG.ACC ベッド-SG.ACC
 「私のベッドは整えられている」

- e. Má-m dokouřen-ou cigaret-u.
 持っている-1SG.PRS 吸われた-SG.ACC タバコ-SG.ACC
 「私のタバコは吸い終わっている／私は吸い終わったタバコを持っている」

動詞 mít と受動分詞を組み合わせた文に関して、例えば Načeva-Marvanová (2010) は、動詞 mít が完了アスペクトを表す形式に文法化していることを示すものとして、その通時的な変遷と共時的な慣習化の程度をコーパスを使って調査している。しかし、こうした文の意味記述は十分とは言えない⁴。例えば、形式上よく似ている (1) と (2) の各例はどのように異なるのか、また、どんな共通点を持っているのかを示した研究は見当たらない。また、(2e) は (2a-d) と異なり、二通りの解釈があり得るが、これを明確に説明できるような記述も現在までなされていない。

本稿の目的は、(1) と (2) の意味的な違いが文の構造（構文）の違いに由来するものであることを示すことである。また、(1) と (2) のいずれも、どちらの構文として理解するかによって二通りの解釈が潜在的に可能であり、意味的な整合性によってどちらの解釈が取られるかが決まることを主張する。同時に、それぞれの構文の意味的な特徴付けの大枠を提示する。

2. 所有構文解釈と結果所有構文解釈

本節では、(2) のように動詞 mít 「持っている」 + 受動分詞 + 名詞という要素からなる文がどのような構造を持つ文なのか、(1) のような文とどのように異なるのかを検討する。まず、(3) を比較する。

⁴ Panerová (2014) にも5ページほどの記述があり、結果状態を表す形式として紹介されているが、所有を表す構文との関わりは論じられていない。

(3)

a. *Má-m ten sněden-ý dort.
 持っている-1SG.PRS その.SG.ACC 食べられた-SG.ACC ケーキ.SG.ACC
 「私はその食べられたケーキを持っている」

b. Má-m sněden-ý ten dort.
 持っている-1SG.PRS 食べられた-SG.ACC その.SG.ACC ケーキ.SG.ACC
 「私のそのケーキは食べ終わっている」

(3a)が容認されない一方で、(3b)が容認されるが、この違いは何に起因するのだろうか。(3a)ではten snědený dortが名詞句を構成していると考えられる。一般化すると、この文は mít + NP という、(1)の各例と同じ構造を持っていると考えられる。(1)を見れば分かるように、mít + NP という構造は、主語が目的語を所有していることを表す。(3a)が容認されないのは、すでに存在しない対象「その食べられたケーキ」と所有関係が意味的に整合しないためであると考えられる。

一方で、(3b)では受動分詞 snědený + 指示詞 ten + 名詞 dort という語順になっている。チェコ語ではこれらの要素が句を構成する場合、通常は指示詞 + 受動分詞 (形容詞) + 名詞という語順となる。そのため、snědený ten dort は名詞句ではない可能性が考えられる。その場合、(3b)は(3a)や(1)と異なる構造を持っていることになるが、どんな構造が考えられるだろうか。

意味の側面から検討してみる。(3b)の文が発話される文脈は、例えば「さっき買ってきたケーキはまだあるか」と聞かれて「そのケーキはもう食べてしまった」と伝える場合などが考えられる。つまり(3b)は「ケーキ」が「食べ終わった」という状態にあるということ伝える文であると言える。一般化すれば、「ある対象が何らかの結果状態にある」という事態が成立していることを述べる文である。

したがって(3b)では、名詞句 ten dort と受動分詞 snědený が、主述関係を表す小節 (small clause) を構成しているものと考えられる。つまりこの文は、名詞句の指示対象 (以下、名詞句) が受動分詞の表す結果状態にあることを表す文である。

するとやはり、(3a)(1)と(3b)では、単に語順が異なるだけではなく、文の構造が異なっているということになる。つまり、(3a)(1)は mít + NP という構造を、(3b)は mít + SC という構造を中心とする文である。以下、前者を所有構文、後者を結果所有構文とそれぞれ呼ぶ。これを、それぞれの構文が持つ意味の暫定的な特徴付けと共に表1に示す。

表1 所有構文と結果所有構文の暫定的な特徴付け

所有構文	mít + NP	主語が目的語を所有している
結果所有構文	mít + SC	小節の名詞句が受動分詞の表す結果状態にある

(3a)の ten snědený dort は必ず名詞句として解釈されると考えて良いだろう。なぜなら、これらの連続する三つの語から ten と dort だけが名詞句を構成し、それらの間に置かれた受動分詞 vypité がこの名詞句と共に小節を構成するというのはあまりに不自然な解釈であるからである。実際、(3b)が容認されるような文脈を整えても、(3a)の文が結果所有構文の解釈を受けて容認されるということはなかった。また、前述のように、(3b)が所有構文

解釈を受けるといことも考えにくい。つまり、(3a)と(3b)はどちらも、どちらの解釈を受けるとかが構造上定まっている例であると言える。

では、構造上どちらの解釈も可能な場合はどうなるだろうか。以下、(2)に挙げた例を順次検討していく。

(2) 再掲

- a. Má-m sněden-ý dort.
 持っている-1SG.PRS 食べられた-SG.ACC ケーキ-SG.ACC
 「私のケーキは食べ終わっている」
- b. Má-m odebran-ý řidičák.
 持っている-1SG.PRS 没収された-SG.ACC 運転免許証-SG.ACC
 「私の運転免許証は没収されている」

(2a)は一見、snědený dort「食べられたケーキ」が名詞句を構成する所有構文のように見えるが、(3a)で示したように(2a)を所有構文として解釈すると意味的な整合性が取れない（「食べられたケーキ」を所有することはできない）。しかし、(2a)を(3b)から指示詞が取れた文として見れば、この部分が小節を構成する結果所有構文であるという解釈が構造上可能であることが分かる。所有構文解釈を取れないこの文は自動的に結果所有構文として解釈され、「ケーキが食べ終わった状態にある」という事態が成立していることを伝える文となる。(2b)でも同様に、「没収された運転免許証」と所有関係が意味的に整合しないために結果所有構文解釈が取られる。このように、構造上どちらの解釈も可能な場合には、意味的により整合的な解釈が選択されることが分かる。

(2c-d)も所有構文解釈ではなく、結果所有構文解釈が取られていると考えられる。これは、所有構文解釈が強制される(4)が不自然な文と判断されることから分かる。

(2) 再掲

- c. Má-m otevřen-é okn-o.
 持っている-1SG.PRS 開けられた-SG.ACC 窓-SG.ACC
 「私の(部屋の)窓は開いている」
- d. Má-m ustlan-ou postel.
 持っている-1SG.PRS 整えられた-SG.ACC ベッド-SG.ACC
 「私のベッドは整えられている」
- (4)
- a. *Má-m to otevřen-é okn-o.
 持っている-1SG.PRS その.SG.ACC 開けられた-SG.ACC 窓-SG.ACC
 「私はその開けられた窓を持っている」
- b. *Má-m tu ustlan-ou postel.
 持っている-1SG.PRS その.SG.ACC 整えられた-SG.ACC ベッド-SG.ACC
 「私はその整えられたベッドを持っている」

表1で示したように、所有構文は主語が目的語を所有していることを示す構文である。「開けられた」「整えられた」という一時的な状態は、ある人物が所有する(部屋の)窓やベッ

ドの性質を描写する表現として不適切であると考えられる（どんなベッドを持っているかという質問に対して「整えられたベッド」は不適切である）。(5)のように一時的ではない性質を表す形容詞による描写ならば所有構文として解釈できることからそれが分かる⁵。

(5)

- a. Má-m to velk-é okn-o.
 持っている-1SG.PRS その.SG.ACC 大きい-SG.ACC 窓-SG.ACC
 「私はその大きい窓を持っている」
- b. Má-m tu velk-ou postel.
 持っている-1SG.PRS その.SG.ACC 大きい-SG.ACC ベッド.SG.ACC
 「私はその大きいベッドを持っている」

このように、(2c-d)も、文脈に応じて、意味的により整合的な結果所有構文解釈が選択されていることが分かる。

ここまでの議論から、単純に、動詞 *mit* とともに（対格形の）形容詞と名詞が現れていれば所有構文解釈、受動分詞と名詞が現れていれば結果所有構文解釈が取られると考えればよいにも見える。しかし、受動分詞が現れているものの、所有構文解釈と結果所有構文解釈がどちらも可能な場合がある。(2e)はその例である。

(2)再掲

- e. Má-m dokouřen-ou cigaret-u.
 持っている-1SG.PRS 吸われた-SG.ACC タバコ-SG.ACC
 「私のタバコは吸い終わっている／私は吸い終わったタバコを持っている」

(2e)が結果所有構文として解釈されると、「タバコ」が「吸われた」状態にあること、つまり「タバコが吸い終わっている」という事態が成立していることを表す文となる。これに対して、所有構文として解釈されると、「吸われたタバコ」つまり「タバコの吸殻」を手に行っていることを表す文となる。どちらの場合も整合的に解釈することが可能なため、文脈に応じて適切な解釈が選択されることになる。(6)も、二通りの解釈が可能になる例である。

(6)

- Má-m vyprodan-é vín-o.
 持っている-1SG.PRS 売り切られた-SG.ACC ワイン-SG.ACC
 「私のワインは売り切れている／私は売り切れのワインを持っている」

(6)が結果所有構文として解釈されれば、「ワイン」が「売り切れた」状態にあることを伝える文となる。文脈としては、例えば酒屋の店主が、ワインが売り切れてしまったことを客に伝える場面が考えられる。一方、所有構文の解釈「私は売り切れのワインを持っている」は、一見、意味的に整合性がないように見えるが、例えば「どこにいても売り切れ

⁵ (4a)も、例えば *otevřené okno* 「開き窓」という開いたまま閉じないような特殊な種類の窓であると想定した場合は、例えばその「開き窓」が自分の部屋にあることを述べる文脈で容認される。これも、一時的ではない性質の描写ならば所有構文として解釈することができることを示す例であると言える。

になってしまっている、とあるワインを私は持っている」という事態を表す文脈では所有構文としての解釈が容認される。

さらに、動詞 *mít* とともに（対格形の）形容詞と名詞が現れていれば常に所有構文が取られるというわけでもない。(7) で現れているのは受動分詞ではなく形容詞だが、所有構文解釈の (7b) が容認されない一方で結果所有構文解釈の (7c) が容認されることから、(7a) は *mít + SC* という構造を持つ結果所有構文であると考えられる。

(7)

- a. *Má-m hotov-ý úkol.*
 持っている-1SG.PRS 終わった-SG.ACC 課題-SG.ACC
 「私の課題は終わっている」
- b. * *Má-m ten hotov-ý úkol.*
 持っている-1SG.PRS その.SG.ACC 終わった-SG.ACC 課題.SG.ACC
 「私はその終わった課題を持っている」
- c. *Má-m hotov-ý ten úkol.*
 持っている-1SG.PRS 終わった-SG.ACC その.SG.ACC 課題.SG.ACC
 「私のその課題は終わっている」

もちろん、どんな形容詞でも結果所有構文として解釈することができるわけではない。形容詞 *hotový* 「終わっている、完了している」は一種の結果状態を表す形容詞であるからこそ結果所有構文で整合的に解釈することができるのであって、例えば (1) を結果所有構文として解釈することはできない。

名詞と共に現れるのが形容詞ならば所有構文解釈の、受動分詞ならば結果所有構文解釈の整合性が（他方の解釈よりも）高くなる傾向は確かに存在する。しかし、どちらの場合においても所有構文と結果所有構文という二通りの解釈の可能性があるが、どちらの解釈が取られるかは、意味的に整合性のある解釈のうち、文脈に適したものが選択されると考えられる。

3. 所有

前節で、所有構文は主語が目的語を所有することを示す構文であり、結果所有構文は小節の名詞句が受動分詞（あるいは一部の形容詞）の表す結果状態にあることを示す構文であるとした。この2つの構文を区別することによって、(1) のような文と (2) のような文の相違点が明確になったと言えるだろう。それでは、この2つの構文はどんな共通点を持っているだろうか。本節では、両構文に所有という概念がどのように関わっているかを検討することで、その共通点を示す。

(1) のような所有構文は当然、主語と目的語の間の所有関係を含意しているが、結果所有構文においてはどうかだろうか。

(8)

- a. *Má-m otevřen-é to okn-o.*
 持っている-1SG.PRS 開けられた-SG.ACC その.SG.ACC 窓-SG.ACC
 「私の（部屋の）その窓は開けてある」
- b. *Má-š otevřen-é dveř-e.*

持っている-2SG.PRS 開けられた-PL.ACC ドア-PL.ACC⁶
 「君の(部屋の)ドアが開いているよ」

c. *Má-m ustlan-ou jeho postel.
 持っている-1SG.PRS 整えられた-SG.ACC 彼の ベッド.SG.ACC

結果所有構文の(8a)は、単に「その窓」が「開いている」という結果状態にあるという場合に常に用いることができるわけではない。この文が容認される文脈は、主語である「私」の部屋などの窓が開けられた状態にある場合であって、例えば「私」の友人の家の窓が開けられた状態にある場合には用いることができない。つまりこの例においても、主語「私」と小節の名詞句「その窓」の間には所有関係が含意されていることが分かる。同様に、(8b)も結果所有構文が所有関係を含意していることを示す例である。この例が容認される文脈は、主語である「君」が所有する(つまり所有権を持つ、あるいは特権的に使用している)部屋などのドアが開いているということを伝えようとする場合であり、例えば発話者が所有する部屋のドアを指している場合は用いられない。また、(8c)が容認されないのは、主語「私」と「ベッド」の間にある所有関係が示されている一方で、所有代名詞 jeho 「彼の」によって「彼」と「ベッド」の所有関係も同時に示されるためであると考えられる。

このように結果所有構文は、小節の名詞句が受動分詞の表す結果状態にあることを示すだけでなく、主語と小節の名詞句の間に所有関係を含意することが分かる。これを踏まえた所有構文と結果所有構文の特徴付けを表2に示す。

表2 所有構文と結果所有構文の特徴付け

所有構文	mit + NP	主語が目的語を所有している
結果所有構文	mit + SC	主語に所有される小節の名詞句が受動分詞の表す結果状態にある

ただし、どちらの構文においても所有関係は含意されているものの、両構文が情報の焦点をどこに置くかには違いがある。つまり、所有構文においては文の表す情報の焦点は所有関係にあるのに対して、結果所有構文が焦点を置くのは、対象がある結果状態にあるという主述関係である。この違いのために、存在しない対象との所有関係を表す(3a)が容認されないのに対して、ある対象が存在しない状態にあることを表す(3b)が容認されるのだと考えられる。

4. まとめ

動詞 mit + 受動分詞 + 名詞という要素からなる文が、形式上よく似た動詞 mit + 形容詞 + 名詞という要素からなる文とは異なる意味を持っていることや、その意味の違いの背後にはどんな要因が働いているのかについては、これまで明確にされていなかった。本稿では、前者の文は多くの場合 mit + SC という構造を持ち、対象がある結果状態にあることを示す文であると考え、所有を表す mit + NP という構造と区別する必要があることを主張した。その上で、どちらの文においても所有構文と結果所有構文という二通りの解釈の可能性が

⁶ 名詞 dveře 「ドア」は単数形を持たず、例え一つのドアを指していても常に複数形である。

あり、いずれの解釈でも意味的に整合性がある場合は、文脈に適した解釈が選択されることを示した。

本稿で示した二通りの解釈とその特徴付けによって、動詞 *mít*、受動分詞、名詞から構成される文がどのように解釈されるかについて、少なくとも大枠を示すことはできたが、これもまだ十分な記述とは言えない。例えば、現状の記述では (9) の例の容認性の低さを説明することができない。これには名詞句の定性や所有の典型性が関わっている可能性が高いと考えられるが、詳細な説明は今後の課題とする。

(9)

?	Má-m		vyřešn-ý		problém.
	持っている-1SG.PRS		解決された-SG.ACC		問題.SG.ACC
	「私の問題は解決されている」				

略号

ACC=対格、PL=複数、PRS=現在、SG=単数

参考文献

- Langacker, Ronald W. (2009). *Investigations in cognitive grammar*. (Cognitive linguistics research 42.) Berlin: Mouton de Gruyter.
- Načeva-Marvanová, M. (2010). *Perfektum v současné češtině*. Praha: Nalkadatelství Lidové noviny.
- Panerová, J. (eds.). (2014). *Mluvnice současné češtiny 2: syntax češtiny na základě anotovaného korpusu*. Praha: Karolinum.
- Piřha, P. (1992). *Posesivní vztah v češtině*. Praha: AVED.

Possessive Construction and Resultant Possessive Construction in Czech

Kenshiro ASAOKA

Keywords: Czech, possession, resultative state, small clause

Abstract

In the Czech language, the combination of the possessive verb *mít* and a passive participle is used to say that something is in a state resulting from a completed action. The present paper argues that this meaning is derived from the structure *mít* + *SC*, thereby distinguishing this structure from *mít* + *NP*, which indicates simple possession. In many cases, sentences featuring *mít* + *adjective* + *noun* involves the structure *mít* + *NP*, while sentences based on *mít* + *passive participle* + *noun* involves the structure *mít* + *SC*. Making the distinction between these structures allows us to suggest that although they may look similar to each other, the two types of sentence differ semantically precisely because they are structurally different. It is also maintained that some sentences can be taken to instantiate either the structure *mít* + *NP* or the structure *mít* + *SC*, which structure prevails depending on which interpretation is more plausible.

(あさおか・けんしろう 東京大学大学院)